日本語の物語構築：
視点を判断する構文的手がかりの再考

中　浜　優　子・栗　原　由　華

1. はじめに

本研究は物語構築における「視点」のおき方を考察したものである。従来の研究では、日本語母語話者と日本語学習者の視点のおき方についての違いが明らかにされてきている。「視点」を考察する際に、先行研究では、ヴォイスと授受表現を構文的手がかりとして用いており、この二つの手がかりから調査、分析しているものがほとんどである。そして、構文的手がかりであるヴォイス、授受表現が用いられない描写に関しては、中立的な描写であると見なされている。先行研究においては、日本語学習者は複数の「視点」から描写する傾向があるのに比べ、日本語母語話者は一つの「視点」からコトガラを描写するとされている。しかし、日本語母語話者の産出した物語文を見ても、中立的あるいは複数の「視点」を持つ描写も含みながら構成されているように感じられる場合がある。また、先行研究で中立的であると判断された記述にも、「視点」が明らかにされていると思われるものもある。先行研究において指摘されてきた日本語母語話者と日本語学習者の「視点」におけるディスコースの違いは、「視点」の分析にヴォイス・授受表現という限られた構文的手がかりしか用いていなかったことに起因している可能性もあるのではないだろうか。

そこで、本研究は「視点」を表す構文的手がかりそのものを再考すべく、ヴォイス・授受表現だけではなく、新たに移動動詞、主観表現、準感情表現、感情表現という４つの構文的手がかりを設定した。本稿では、物語構築における「視点」のおき方を以上の手がかりを基に考察するとともに、日本語母語話者の物語談話の全体的特徴を分析し、記述することを目的とする。

2. 「視点」の定義

本研究における「視点」を定義するために、これまで「視点」がどのような概念で捉えられてきたかを、大きく３つに分けて概観する。

まず、「視点」を一つのまとまりとして捉えたものには、今日の視点論の基本ともいえる大江（1975）や久野（1978）があり、大江（1975）は「いく」「くる」や授受動詞、「うる」「かう」などの対のある動詞を考える中で「視点の軸」、すなわち「授受動詞が描写する授受のできごとを、その当事者として内部から主観的に眺める人の位置」を設定し

ている。また、「話し手が現実に位置しようとしまいと、描かれる動きを彼がそこに身を置いて眺めるような場所」である「話し手のホームベース」を設定している。大江はこのように「視点」とは誰に「軸」が置かれているか、またこの「軸」は現実から離れて話し手が身をおいて眺める場所をも含んだ概念であると説明している。

一方、久野は「視点」を「話し手が何処にカメラをおいて、この出来事を描写しているか」という「カメラ･アングル」という概念を設定して説明している。この「カメラ･アングル」は誰かに近い位置に設定することができ、最大限その人物に近づいた状態を「同化」「自己同一視化」（Identification）と呼び、「共感度」と名付けて説明している。

次に、「視点」を見る位置と見る対象とに分けて考えたものには、佐伯（1978）や宮崎･上野（1985）がある。佐伯は「視点」を「対象を見る目の位置」である「視座」と、「視座からながめたときに注目される対象の側面や属性」である「注視点」にわけて捉えている。佐伯によると、「視座」は固定されている必要があるのに対し、「注視点」は「文の中でいろいろと動くもの」であるという。

宮崎･上野も佐伯と同様に、「視点」を二つに分けて捉えている。宮崎･上野では「視点」を「仮想的自己」の配置と「見え」にわけて捉えている。「仮想的自己」とは、「他者になって、その心情を実感的に理解する」すなわち「他者の共感的理解」をおこなうことであるとしている。「仮想的自己」の配置により、他者へ入り込み、その内面をも把握できるとしている。また「見え」とは、「仮想的自己」を配置した他者の位置から見えるコトガラを指している。

３つ目には「視点」を「視点人物」「視座」「注視点」「見え」の４つに細分化した茂呂（1985）や松木（1992）がある。「視点人物」とは「誰の目から見ているか」にあたり、視点人物がコトガラをながめている場所が「視座」になる。また、「視点人物」が見ている先が「注視点」になり、注視点にあるコトガラが「見え」になる。

本研究では、このような「視点」の捉え方を統合的に採用し、「視点」を「視座」という概念から考察する。第三者が登場する物語文においては、話し手が中立の立場を取らない限り、登場人物のいずれかの人物に「視座」を定め、その登場人物が位置する場所からコトガラを眺めることになる。このことから、「視座」を話し手が同じ位置を取る登場人物と、物語の中でその登場人物が位置する場を含む概念とする。つまり、話し手が自らを登場人物と同一化した状態の時に、その登場人物の立場から事象を捉えストーリーを構築していくという現象である。[1]

3.「視点」を判断する構文的手がかり

本研究を行うにあたり、「視座」を判断する手がかりについては、先行研究で考察されてきたヴォイス、授受表現だけではなく新たに４つの構文的手がかりを加えた。大江

（1978）、久野（1985）で導入された「視点」の概念から、ある一つのコトガラが誰の立場から眺められるかによって異なる言語形式を用いる場合があることが分かる。大江で説明されている「行く」「来る」や「売る」「買う」、「貸す」「借りる」がこれにあたる。例えば、モノの売買を考えた場合、同じコトガラを表していても売り手にとっては「売る」、買い手にとっては「買う」という表現が用いられる。このように、同じコトガラを描写する場合に２つの表現が存在し、話し手は、どちらかの表現を用いることで自動的に「与え手」あるいは「受け手」のいずれかの立場に立つことが求められる場合がある。これらは人、モノ、コトの移動を表していることから、「移動動詞」と定義し、話し手の視点を示す手がかりの一つとみなす。

次に、佐伯、宮崎・上野らの先行研究から、その人物に入り込むことによって内面を描写できるということに注目した。内面の描写には意思、判断の所在である「わかる」「思う」などの主観を表す表現と、「嬉しい」「悲しい」など感情を表す表現がある。いずれも当事者でしか知り得ない感情を表す表現だと言える。寺村（1982）、水谷（1985）によれば、これらの表現は、第三者の主観や感情を表す場合には、「～そうだ」「～ようだ」「～らしい」のような伝聞、推定のムード表現や、判断を示す「～のだ」を伴ったり、「思っている」のようにアスペクトを伴う場合もある。また、接続助詞を伴って従属節となる場合もある。そこで、本研究では、話し手が自らの感情を物語の登場人物に投影させているといえるケースのみを取り上げ、連体修飾の形を取る場合、判断を示す「の」「ん」を伴う場合、「～ことにしたので」のように接続助詞を伴い従属節となる場合、ムード表現を伴う場合、アスペクトを伴う場合は対象外とした。また、主観を表す表現と、感情を表す表現を区別し、構文的手がかりとすることとした。そして、感情表現には、いわゆる「感情形容詞」と呼ばれる形容詞以外にも、「おどろく」「落胆する」など感情を表す動詞があることに注目した。これらの表現も「感情表現」として捉えることができるのであるが、手がかりごとの分析結果が明らかになるよう、敢えて別の項目を立てた。一般に「感情表現」と言えば感情形容詞を指すことから、感情形容詞を「感情表現」、そして、感情を表す動詞をこの類に準じるという意味で「準感情表現」と呼ぶことにした。

日本語母語話者は一つの「視点」からコトガラを描写するとされている先行研究をふまえ、本研究では、まず全体を通して手がかりから判断される「視座」が実際のところ一つであるか、あるいは複数の「視座」が存在するかを分析し、さらに「視座」のおかれ方について局面ごとに検討した。続いて、会話文の埋め込みと「視座」の移動との関連を、その前後に使用された構文的手がかりによって分析した。また、日本語母語話者がどのような種類の手がかりを使用する傾向にあるかも分析した。

4. 調査

20歳から39歳までの日本語母語話者に調査を依頼し、44人から回答を得た。そのうち有効回答は39であった。得られた44回答のうち、会話のみで記述してあるもの、話し手が一人称「俺」「僕」を用いて記述してあるものは「視座」が明らかでない、あるいは「視座」が予め設定されているため、分析が意味をなさないと判断し、調査対象から除外した。調査に用いた資料は５コマから成る漫画である。これは中国の大学入学試験において英語の作文試験用に使われた６コマから成る漫画を、本研究のために５コマに構成し直したものである。本来の漫画では、５コマ目に登場人物のうちの一人だけが描かれており、被験者の視座を操作しかねないという理由から、構成し直した。

先行研究では４コマから10コマの漫画が用いられており、いずれも分析に十分な量の発話や構文的手がかりが得られていることから、４コマ以上から成る漫画であれば、分析に必要なデータが得られると判断し、本研究においても５コマから成る漫画の使用を決定した。（資料１）

この漫画を用いたのは次の理由による。まず、登場人物が１コマ目から５コマ目まで同一の２人であり、同一の大きさで描かれていることである。登場人物を２人に絞ることで、「視点」がどちらにあるのかを明確に分析することが可能であると判断した。また、２人が一貫して画面に現れていることで、作為的にどちらか１人に「視点」が当たることが回避できる。これによって、被験者の「視点」を意図的に操作しているのではないかという疑いを排除することができる。さらに、漫画の内容から本研究で分析の対象とすることにした移動動詞が出現しやすいであろうと思われたことも、この漫画を採用した大きな理由の一つである。

以上のことから、今回の調査で用いた漫画は、調査資料として妥当であると判断した。

この資料を用いて、被験者には具体的に次のような指示を与えた。１）時間は20分を目安にするが、完全に書き終わるまで時間を取ってよい。２）１コマ目～５コマ目の漫画は一つの物語である。これらを見て、日本語で内容を記述すること。３）会話は含んでもよいが、吹き出しや会話だけではなく、文章で記述する。４）登場人物の設定は自由である。５）記述の仕方は自由である、という５点である。

5. 調査結果

このようにして得られたデータをもとに、まず、「視座」のおき方を数量的に分析した。被験者の記述から、手がかりとなる構文を全て抜き出し、その構文的手がかりを含む文を検討し、示された「視座」を判断するという方法を採った。

5.1 「視座」のおき方

図１で示すように、日本語母語話者のうち約70％が「視座」を１人の人物に統一しており、内訳は男性が59.0％、子供が10.3％であった。また、12.8％は両方に「視座」をおいており、「視座」を判断する手がかりを産出しなかったものは17.9％であった。日本語母語話者の「視座」を一人におくという傾向は先行研究の結果を支持するもので、視座の構文的手がかりの種類を増やすことにより結果に違いは出ないという事が明らかになった。

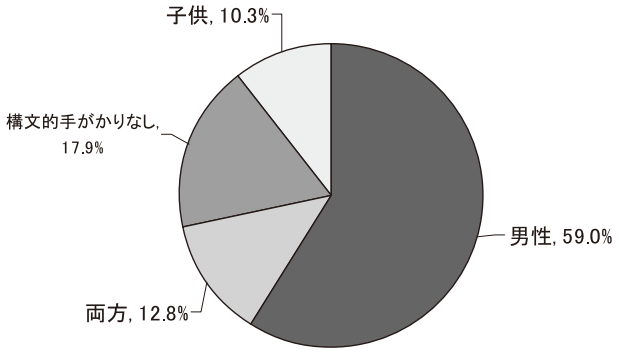


図１　「視座」のおき方

上述の通り、物語文全体で「視座」を１つに定めている日本語母語話者は約70％であったが、約10％は複数の「視座」を定めている。先行研究で触れられていないこの点を明らかにするために、山田（1985）の「単一の局面は単一のカメラ・アングルしか持ち得ない」という定義を参考にし、本研究データの質的分析を行った。

山田は久野（1978）で導入された「カメラ・アングル」の概念にある「単一の文は、単一のカメラ・アングル（視点）しかもち得ない」という法則に修正を加えている。山田によれば、「単一の局面」で「単一のカメラ・アングル」を持つ文とは、次のようなものである。

（1）太郎が花子にお金をくれたあと、私は花子を勘当し、太郎を養子にしたところ、今度は花子が太郎にお金をくれた。（山田　1985：37）

山田の指摘にあるように、場面ごとに「視座」が統一されている可能性を探るため、局面ごとの視座の設定を質的に分析することにした。これは、複数の「視座」を持った物語談話が産出された場合、それはどのような設定（単一局面･複数局面）の下で起こっ

たのかを明らかにするために有効であると考えたからである。山田の理論から考えると、単一の局面では、視座が単一であることが予想される。

視座の移行と局面の関連を考察する際、調査で用いた漫画の１コマ目から４コマ目を同一局面、５コマ目で局面移動として分析した。これは１コマ目から４コマ目は同一の部屋の内部が描かれており、全てのアクションは同じ場所（本棚の前）で起こっているのに対し、５コマ目は場面が家の外に移動していることからこのように判断した。

「視座」の移行と局面との関連では、日本語母語話者に共通するパターンが見られた。山田の理論から導かれたとおり、本研究で39名中37名の日本語母語話者が、単一局面で単一の視座を用いていた。

しかし、単一局面で視座が動くという例外も、２名に見受けられた。この２名の産出した単一局面で視座が動く表現をさらに分析すると、会話文の導入がきっかけで「視座」が移動しているのが分かった。以下に単一局面で視座が動いた２名の文例を挙げる。

JNS11

(2) 孫がおじいちゃんに本を借りにきました。→「視座」はおじいちゃん

「おじいちゃん、あの本貸して！」

おじいちゃんは喜んで貸してくれました。→「視座」は孫

JNS12

(3) 女の子がおじいちゃんのところにおねがいにきました。→「視座」はおじいちゃん

「おじいちゃん、本をかしてほしいんだけど。あつい本がいいの。」

おじいちゃんはこころよく本を１冊かしてくれました。→「視座」は女の子

JNS11、JNS12両話者とも「おじいちゃん」に視座をおいた後で、女の子の会話文を挿入することにより、視座が女の子に動いている。このように、会話文を挿入することで「視座」の移動が違和感なく行われていると考えられる。

このことから、会話文の出現に伴って、視座の移動につながる構文的手がかりが産出されているのではないかという可能性を探るため、会話文の埋め込みによる「視座」の動きに注目し、分析を行った。

5.2　会話文の埋め込みと「視座」の関連

日本語母語話者の記述39のうち、28に会話文を含む記述が見られた。その28を対象とし、会話文の埋め込みがある文について検討した。

会話文の埋め込みが見られる文から、会話文の前後に見られる行為、感情を表す表現を抽出し、それらが「視座」を判断する構文的手がかりであるかを判別し、構文的手が

かりのものに関しては、会話文の出現と視座の移動との関連を調べた。

会話文の前後に表れた表現を全て抽出すると、「視座」を判断する構文的手がかりが20、本研究においては構文的手がかりとしない中立的な表現が68であった。その中でも最も多く産出された表現は「と言う」であり、これは44抽出された。「視座」を判断する構文的手がかりの産出総数は以下の通りである。

使役	1
～ていく	3
くる	1
～てくる	3
渡す	3
見送る	1
思う	5
ことにする	1
感心する	2
合計	20

表１　構文的手がかりと総産出数

さらに、抽出された構文的手がかりを、会話文の発話者と「視座」との関連から分析を行った。会話文の埋め込みには、構文的手がかりが示す「視座」と会話文の発話者が一致している場合と、会話文の発話者と構文的手がかりが指し示す「視座」が異なる場合が考えられる。

次の例は、構文的手がかりが示す「視座」と会話の発話者が一致している場合である。

JNS13

(4) すると、お父さんは「この本を読んでごらん」と言って、一冊の絵本を渡す。

また、以下の例は、会話文の発話者と構文的手がかりが指し示す「視座」が異なる場合である。

JNS 1

(5) 女の子が、本の係をしている叔父さんに「本を貸して」と言いに来た。

次に、先ほど抽出された20の構文的手がかりについて、構文的手がかりが指し示す「視座」と会話文の発話者が一致するかどうかを調べた。その結果は以下の通りである。

構文的手がかり	一致	不一致
使役	1	0
～ていく	0	3
くる	0	1
～てくる	0	3
渡す	3	0
見送る	1	0
思う	5	0
ことにする	1	0
感心する	2	0

表２　構文的手がかりが示す「視座」と会話文の発話者との一致・不一致

この結果から、会話文の埋め込みが見られた場合、会話文の前後に産出される手かがリが示す「視座」と会話文の発話者が一致する傾向があることが分かった。しかし、「視座」を判断する構文的手がかりが、必ずしも会話文の発話者と一致しない場合もあり、それは特に話し手への接近、離反を示す「～ていく」「くる」「～てくる」に限られていた。構文的手がかりが示す「視座」と会話文の発話者との不一致が、これら３つの移動動詞の性質に起因することも考えられるが、事例が少ないことから、本稿において提言は控える。また、今回は書き言葉を分析したが、話し言葉の場合、会話文挿入の際におこるポーズ、ためらいなど、他にも視座の移動に関連する要因が出てくるのではないかと言える。例えば、（２）で紹介した「おじいちゃん、あの本貸して！」という会話文であるが、発話データの場合、その会話文を強調し、またその後、ポーズを置いたり、非言語行動なども見たれたりした場合、それらが視座の移動に与える影響も考えられ、また、筆者がどのような意図で会話文を挿入したかも、発話データの方が明確化され、判断が容易になるのではないかと考える。この事については、今後の課題として、本稿の最後でも述べる。

5.3　局面ごとに見た構文的手がかりの産出

前述のように、５コマ漫画のストーリーの１コマ目から４コマ目までを同一局面とみなした。そこで、まず、日本語母語話者の産出した構文的手がかりをタイプごとに調べ、その後局面ごとの手がかりの産出傾向を探った。１コマ目から５コマ目までの構文的手がかりの産出総数は94であり、各構文的手がかりカテゴリーの産出率は以下のようであった。

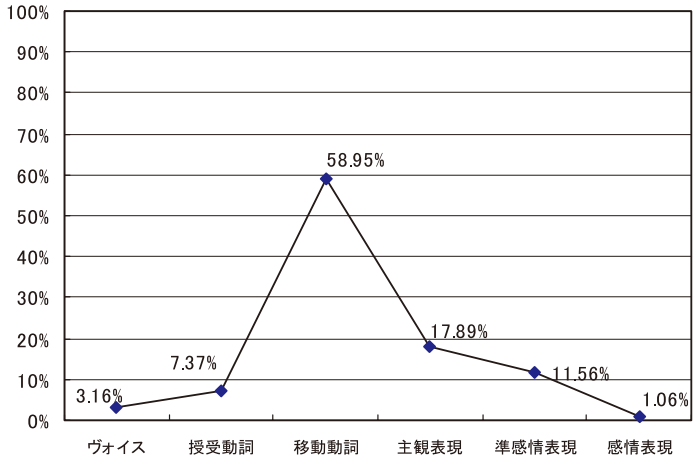


図２　構文的手がかりの産出率

図２が示すように、本研究の母語話者は構文的手がかりとして、移動動詞を主に使っており、次に主観動詞、準感情動詞が見られた。

さらに､構文的手がかりの産出の傾向を局面ごとに見たところ､局面ごとに違うパターンが存在した。図３に、局面ごとに見た構文的手がかりの産出率を示す。１コマ目から４コマ目で授受表現、移動動詞、ヴォイスの順に多く産出されているのに対し、５コマ目では、内面の描写である主観表現、準感情表現を多用しており、感情表現に関しては、産出の総数は少なかったものの、その100％が５コマ目で使用されていることが明らかになった。１コマ目から４コマ目の構文的手がかりの産出総数は56であり、５コマ目の構文的手がかりの産出総数は38であった。

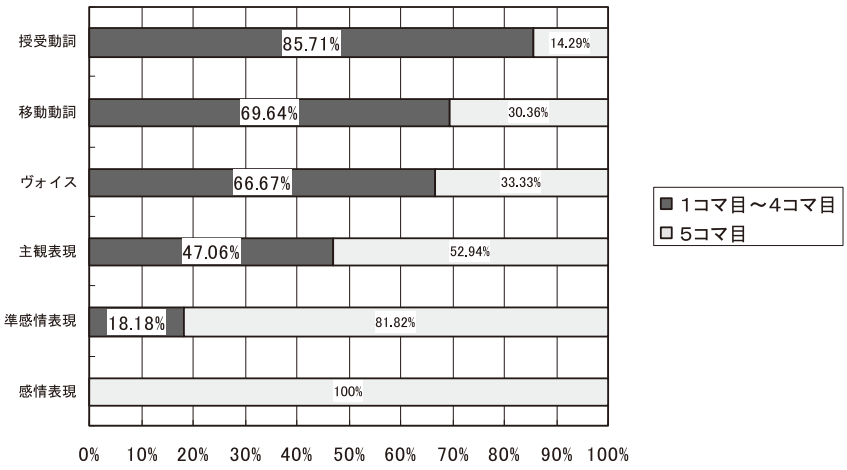


図３　局面ごとに見た構文的手がかりの産出率

このことから、本研究の日本語母語話者は、物語の進行とともに客観的描写を通して視座を明らかにしていきながら、最後の重要なシーンで主観表現、準感情表現、感情表現の主観的描写を使うことにより、話の臨場感を出そうとしたのではないかと考えられる。

6. おわりに

本研究では、従来の研究で「視点」を表す構文手がかりとして考察されてきた授受表現とヴォイスに、さらに４つの項目を加え分析した。その結果、本研究でも、日本語母語話者が同一の局面では単一の人物に視座を置く傾向があることが分かり、先行研究の結果を支持することになった。しかし、２例のみであったが、単一局面で視座の移動が見られたケースがあった。その２名とも会話文を挿入した後、視座が移動していることが分かり、会話文に自らの感情を移入し、その会話文の主体に視座が移ったと考える。こういった談話構成スキルにより、単一局面で複数の視座があっても不自然さが見られなかったのではないかと思われる。また、日本語母語話者が物語文の記述をする際、ストーリー性を重視し、最後の重要シーンで、感情表現などの内面を描写する表現を用いるなどの工夫をする傾向が全体的にみられた。

本稿では、会話文の埋め込みと「視座」との関連を示唆したが、書き言葉では筆者の感情が読者に量りがたいという欠点もある。会話文埋め込みと視座の移動の関連については、話し言葉でも詳しく調査し、明らかにしていく必要性があると思われる。今回は日本語母語話者のデータ分析にとどまったが、同じデータ抽出法、比較に相当する被験者数で、日本語学習者からのデータも抽出し、比較分析することも今後の課題としたい。

付記

この論文の準備に際してお世話になった平井勝利先生に、感謝の意を表したい。

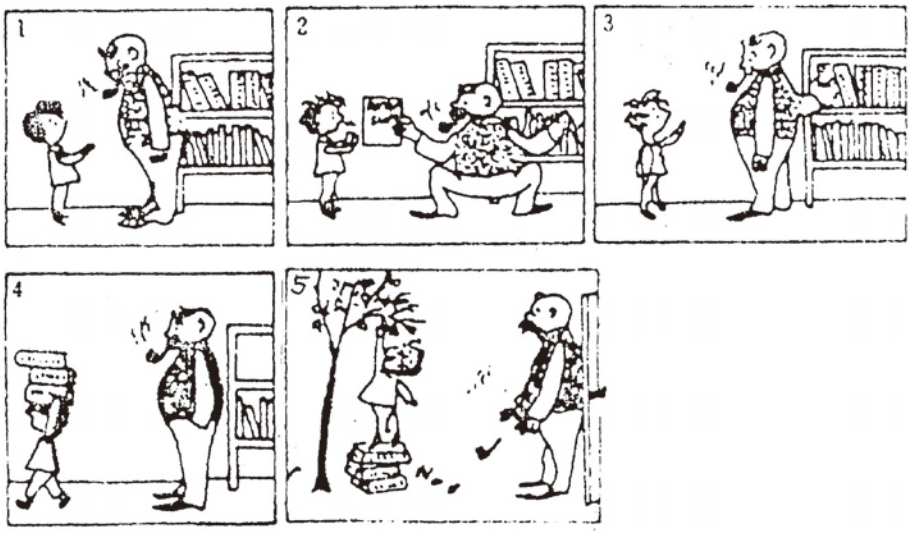
注

1　本研究では書き言葉を取り扱ったが、簡略化のため、先行研究のレビューも含め、全て「筆者」とせず、「話し手」、「話者」として記した。このように本稿では、「話者」「話し手」としたが、視点に関するコンセプトは話し言葉という媒体を限らず、書き言葉においても、またそれ以外の（例えば sign language）においても当てはまるということは明白である。

参考文献

大江　三郎（1975）『日英語の比較研究－主観性をめぐって－』、南雲堂
久野　暲（1978）『談話の文法』、大修館書店
佐伯　胖（1978）『イメージ化による知識と学習』、東洋館出版社
寺村　秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』、くろしお出版
松木　正恵（1992）「『見ること』と文法研究『日本語学』VOL. 11、pp 57－79、明治書院
水谷　信子（1985）『日英比較　話しことばの文法』、くろしお出版
宮崎清孝・上野直樹（1985）『視点』東京大学出版会
山田　純　（1985）「文における視点」『日本語学』明治書院

資料１　本研究で使用した５コマから成る漫画



SALES AND EARNINGS OF COMPANY X